

脱出記

第1章

俺が初めてその男に会ったのは、入学式の翌日だった。場所は大学の正門前である。

その日は学部のオリエンテーションとかで課業は午前中ですべて終了し、学生たちは三々五々帰路についていた。入学してまだ二日目なので、多くの学生は一人でどこかよそよそしい表情で黙々と歩いている。俺も一人、高校時代からの愛用の自転車にまたがって、正門前の交差点で信号待ちをしていたのである。

「ちよつと、いいですか？」

唐突に後ろから声をかけられた。振り返ると、そこに立っていたのがあの男だったのである。

年の頃は二十歳過ぎ、むろん学生だろう。身長はかなり高いが、その割には肉がついていない。スリムと言うよりガリガリといった感じの体の上に、ボサボサ頭がのっかっている。容貌は……何と表現したらいいのだろう。とにかくひと言では形容しがたい顔立ちなのだ。しいて言うならば……そう、歌手の南こうせつと俳優の三ツ木清隆を足して二で割ったような顔を適度に崩してしまえば、多少は類似した造作になるのではなからうか。

それはともかく、俺が振り返るやいなや、その男は「しめた」とばかりにメガネの奥の凹んだ瞳を輝かせ、奇妙な質問を浴びせてきた。

「あなたは神を信じますか？」

はあ？ 神ですか。神……様の何を信じるというのかよくわからないけど、神様とかご先祖様を敬うようとは子供の頃から教えられてきましたよ。父親の実家は神社だし、母親の実家でもご先祖様の月命日には必ず坊さん呼んでお経をあげていましたから。

当時はまだまだ世間ずれしていなかった俺は、実に素直に、情けないほど何気なく

「はい」

と答えてしまったのである。

はたして男は喜色满面となった。瞳が期待に輝き、顔の筋肉が弛緩した。嬉しそうに何度も何度ももうなずきながら、手にした青いバインダーの中から一枚の紙片を取り出して、俺の目の前に広げ

た。

「実はですね、より深く神の世界を実感したいという若者のために、このような有益なビデオをお見せするところがあるんです。この近くですから、さっそく行きましょう。今すぐ行きましょう」

と、俺の手を取らんばかりにして勧める。

なんだかまずいことになってきた。何の気なしに「はい」と口を滑らせてしまったが、わざわざビデオを見に行つてまで、神の世界を実感しようという気などさらさらない。

男に関わるのが面倒になってきた俺は

「ちよつと今日は用事が……」

と逃げを打った。

だが、そんな見えすいた口実が通用するような甘い相手ではなかった。男はみるみるうちに百戦錬磨のスカウトマンの表情になり、風俗店の呼び込みもかくやと思われるような押しの手でたたくみかけてきた。

「今日がダメなら明日でもいいんですよ。いや明後日でも。さあ、いつにしましょうか？」

結局、俺はその翌日にビデオ鑑賞することを強引に約束させられてしまったのである。

男から解放されての帰路、俺の胸は得体の知れない不安に塞がれていたが、それは次第に怒りに変わっていった。

なんで俺が、知りたくもない神の世界とやらを知るために、見たくもないビデオをむりやり見せられなければならないのか。そもそも、あの男は一体どういうわけで、数多くの学生の中から俺なんか白羽の矢を立てやがったのか。カモにふさわしいオーラを放っていたとでもいうのか。考えれば考えるほど、腹立たしく情けなくなってきた。

床に入っても男の顔が目の前にちらついて、なかなか寝つけない。とにかく明日。してしまった約束は果たすとして、妙なことには深入りしないように、できれば明日限りであの男とは絶縁してしまおう。俺はそう思った。

さて、翌日。待ち合わせの場所であの男と落ち合った俺は、神の世界の実感するためのビデオを見せるという場所に連れて行かれた。そこは、大学通りから路地を少し入った所にある、一見何の変哲もない木造アパートであった。

ここで俺は、もう一人の奇妙な人物にひき合わされたのである。

それは四十前後と見える中年女であった。どこにでもいそうで案外いなような、正常なようでどこか尋常でない雰囲気を漂わせた、早い話がとにかく妙な女なのである。

その女と例の男は、俺を玄関脇の小部屋に招き入れた。ここで互いに自己紹介となり、男の名前が明らかになった。『倉辰徳』というのである。どこかで聞いたことのある名前だと思ったら、俺の嫌いなジャイアンツの四番打者と一字違いなのだ。

中年女の名も聞いたはずなのだが、どうしても思い出せない。仕方ないから、以後これを「おばん」と呼ぶことにする。

自己紹介が終わると、おばんと倉は代わるがわる「ビデオを見る会」の目的やシステムについて長つたらしい講釈を始めた。それによると、この会は、神を我々の「親」として認識し、その慈愛を求めると同時に、神が創造した世界の真理を追求していくためのものであるという。そうすれば、いつの日か現れる救世主によって、我々は煩惱から救われるというのだ。

何だかキリスト教と仏教をごちゃ混ぜにしたような教義だが、俺には全くありがたいとは思えなかった。わが国には古来から「神は敬うべし、頼むべからず」とか「人事を尽くして天命を待つ」といった格言がある。つまり、どんな場面であれ、人として最善の努力を尽くすべきであって、安易に神に泣きつくのは邪道なのだ。ましては救世主が現れて救ってくれるなどは、言語道断である。

そんな俺の心中も知らず、おばんは長々としゃべり続けたあげく、

「このビデオシリーズには、八回と十四回と二十回の三コースがあるんです。どのコースを選べれますか？」

などと言い出した。俺が神の世界を実感したいという意気込みに燃えているものと信じきっているらしい。横からは倉が、まじろぎもせず俺の顔を凝視して返事を待っている。

おいおい。俺は今日だけでおさらばするつもりなんですよ。俺は言ってやった。

「いえ、やっぱ結構です。それほど興味ないですから」

おばんのこめかみがピクツと引きつった。倉がさも驚いたという風に見張り、大きく息を吸い込んだ。気まずい沈黙が降りた。

「あのね」

しばらくして、おばんがゆっくりと首を振りながら口を開いた。

「これはあなたにとって非常に大切なことなんですよ。四年間の大学生活を意義あるものにするかどうかは、このビデオ講座にかかっていると断言して過言じゃありません。それほど素晴らしい内容が盛り込まれているんです」

横から倉も口を添えた。

「まったくそのとおりだと思いますよ。この会に入ったおかげで、僕は本当に充実した四年間を過ごすことができました」

再びおばん。

「二十回とは言いません。せめて十四回、いえ、八回でもあなたの人生観は大きく変わると思いますよ。あなたのために、ぜひともお勧めしたいんです」

結局、矢継ぎ早にくり出される甘言に籠絡されて、その場で「ビデオ講座八回コース」の申込書を提出したのだから、よほど俺もどうかしていたに違いない。途中から催眠術にかけられていたような気さえする。

ともかくこういう経緯で、それから二、三日おきにそのアパートへ通う日々が始まった。

アパートには、おばんや倉の他にも大勢の人間が出入りしていた。それらはほとんど学生である。男もいれば女もいたし、四年生や三年生もいれば二年生や新入生もいた。ちなみに、倉は工学部の四年生ということだった。工学部キャンパスはここから二十キロほど離れた別の町にあるのに、こんなアパートに四六時中入り浸って、いったい何をしているのか。

そんなアパートの連中から、あのおばんは「ねえさん」と呼ばれていた。「姉」か「姐」か、どちらの漢字が当てはまるのかはよくわからないが、そんなことはどうでもいい。俺に言わせれば、どうひいき目に見ても「ねえさん」ではなく「おばん」に違いないのである。

アパートの一階には、中央の廊下を挟んで大広間の反対側に、四畳半の和室が四つ並んでおり、いずれの部屋にもテレビとビデオデッキが備え付けられていた。新入会員（新入したつもりはないのだが）は一人ずつその部屋に入ってビデオを見るのである。

さて、俺が約束に時間に向向いて行くと、必ず倉が待っていて「さあ、どうぞ」と、空き部屋に案内する。そして、一回六十分あるいは九十分のビデオをデッキにセットして出て行き、それが終わる頃になると、また入って来る。ビデオを取り出してケースにしまい、俺に向かって「どうですか、いいお話だったでしょう」と言って、にっこり微笑む。それで一回が終了するのである。

いずれにせよ、二時間足らずでことは済むのだから、時間的にはさしたる負担にもならなかったが、問題はビデオの内容であった。

アホらしくて話にならないのである。出演者(物)は、一人の中年男講師と一台のポータブルの黒板だけ。そして、その講師がNHKの教育番組さながらに、黒板に何かを書きながら、しきりに「神」だの「原罪」だの「救世主」だのを連発して、講義を進めていくのだ。その合間には「サタン」とか「霊界」といった単語まで飛び出して来る。「いいお話」どころか、まともな人間ならとても付き合ってはいられない。

二回、三回と回を重ねるにつれ、馬鹿らしさを通り越してだんだん腹が立ってきた。そして、その怒りは当然のごとく、そんな愚にもつかないことを得意げにべらべらとまくしたてている画面の中の講師に向けられることとなった。

俺はビデオデッキの一時停止ボタンをランダムに押し続けてポーズをかけては、そのつど画面に固定される講師の顔——口半開きの痴呆じみた表情や、黒板からカメラの方を振り返る瞬間のおぞましい流し目——に向かって、ありとあらゆる罵声を投げつけては、一人悦に入っていたが、それもじきにつまらなくなつた。

俺は無聊を紛らわせるため、何気なく戸棚の引出しを開けてみて、あつと驚いた。

なんと、そこには映画のビデオがずらりと並んでいたのである。全部で五十本ぐらいになるうか。『ポセイドン・アドベンチャー』や『タワーリング・インフェルノ』といったパニック巨編、『エクソシスト』『オーメン』などのホラー大作、ぐっと渋いところでは『明日に向かって撃て』や『デアリア・ハンター』といった不朽の名作までが揃っているのである。

(これはラッキー！まさしく天の恵み)

俺はさつそく、あのクソおもしろくもないビデオを抜き去り、『明日に向かって撃て』に取り替えた。それから一時間あまりは、ここへ通うようになって初めて経験する充実感に満ちたひと時であった。

適当なところで、俺は例のクソビデオをデッキに戻し、およそ一時間に相当すると思われる分量を早送りしておいた。倉の手前、まじめにビデオを見ていたという形跡を作っておくためである。

再生に切り替えて一呼吸おいたところで、背後のドアが開き、倉が入ってきた。俺は一瞬ヒヤリとしたが、倉はまったく気づいていない様子である。

(ふう、間一髪セーフだ)

数分後、画面の中の講師が、ビデオ講座第三回の終わりを告げた。いつものように倉は、ビデオ

をデッキから抜いてケースに収め、俺の方を振り返って

「どうです。いいお話だったでしょう」

と微笑む。俺は答えた。

「ええ、すばらしい内容でした」

今回に限っては、これが本音であった。倉は喜色を満面に浮かべてうなずいた。

それからというものの、俺はアパートへ通うのが楽しみになった。あれだけ多くの映画を無料で鑑賞できるとなると、これは捨てがたい魅力である。最長コースの二十回を選ばなかったのが、今となっては悔やまれて仕方なかった。

俺がやる気を出したと勘違いしたのか、おばんや倉はこれまで以上の笑顔で俺を迎えるようになり、俺もせっせとアパートに足を運んだ。表面上は和やかな関係が続いた。

しかし、その平穩に亀裂が生じるのは、それほど先のことはなかったのである。

ビデオ講座もあと二回を残すのみとなった、ある夜のことである。

その日、午前中だけ講義に出席した俺は、午後から友人の島原と一緒にアルバイトの口を探して市内を駆け回った。だが、結局それは徒労に終わり、疲労困憊していたのである。

地元の町だと時給六百円から七百円の口はざらにあるというのに、ここではなんと五百円が主流を占めているのだ。

まあ、田舎だということ、家賃その他、生活費の面ではかなりの恩恵を受けているのだから、仕方のないことなのかもしれない。最終的には、時給五百円か、よくても五百五十円程度で我慢しなくてはならないのだろう。

そんなわけで、心身ともに疲れ果ててはいたが、明日のことを考えると心が弾んだ。三日ぶりのビデオ講座で「タワーリング・インフェルノ」の続きが視られるのだ。

この映画はパニック物の傑作として有名だが、何と言っても特筆すべきは、そのキャスティングである。ステイブ・マックイーン、ポール・ニューマン、フェイ・ダナウェイほか、当代の一流スターがずらりと顔を揃えているのだ。

今回は、救助隊のヘリがビルの屋上に激突して粉々になり、燃えさかる炎によって百三十八階のプロムナード・ルームに閉じ込められた人々の恐怖が一層深刻になる、という場面で終わった。

彼らに明日はあるのか。ビルの設計士・ダグやダンカン社長の運命は？ オハラハン消防隊長はいかにして彼らを救出するのだろうか。

考えただけで胸がワクワクしてくる。明日は大学の講義が終わったら、一目散にアパートに直行しよう。

その時、部屋のドアが軽くノックされた。

（こんな時間に誰だろ？）

数名の友人の顔を思い浮かべながらドアを開けて、俺は危うく卒倒するところだった。

なんと、倉が外灯の薄明かりの下で、例の薄笑いを浮かべて忽然と立っているではないか。アパートの連中には俺の住所は教えていないはずなのに、どうしてここがわかったのか。

俺の疑問を見透かしたように、倉が口を開いた。

「大学の学生名簿で住所を調べたんですよ」

嘘だ、と俺は直感した。大学側が、正当な理由もなく倉のような一学生に学生名簿の閲覧を許可するはずがない。とすると、考えられるのはただ一つ、アパートの誰かが俺を尾行していたのではないだろうか。

しかし、この際そんなことをあれこれ詮索しても仕方がない。

「まあ、どうぞ」

と、俺は倉を部屋に招き入れた。

倉はぐるりと部屋を見回し、やがて一隅に置かれたステレオミニコンポに目をとめた。

「いいコンポを持っていますね。どんな音楽を聞くんですか？」

「洋楽が多いですね。TOTOとかCHICAGOとかASIAとか…」

俺は正直に答えたが、倉は今ひとつピンと来ない表情で、曖昧な微笑を浮かべていた。

それからひとしきり、音楽談義に花が咲いた。と言っても、俺が一方的にしやべるばかりだったのだが。

倉がまったく話題についてこれられないのである。こればかりは個人の趣味だから、どうしようもない。

俺に洋楽を語らせたなら、それだけで一冊の本ができあがるだろう。七十年代後半から八十年代にかけて、おもに英米のミュージック・シーンを賑わせたアーティストや曲に関しては、そこらへんの連中じゃ足元にも寄れないほど精通しているという自負がある。もちろん、最新のヒットチャートにも敏感である。洋楽について俺と議論を戦わせることができるのは、前述の島原ともう一人の友人・梶本ぐらいのものだろう。

邦楽しか聴かない連中の中には、俺たちのことを欧米かぶれだと評する者もいるが、アメリカだろうがイギリスだろうが、いいものはいいのである。

俺たちが国内アーティストのことを知らないなどと口にする、と、邦楽派の連中は決まってこう言う。

「そんなことも知らんのか」「テレビ観ないのか」

放つといってくれ。個人の勝手じゃないか。聴きたければ聴けばいいし、聴きたくなければ聴かなくていい。俺が邦楽を知らないように、あんたらは洋楽を知らん。逆にあんたらが邦楽に入れ込んでるように、いやそれ以上に、俺は洋楽に熱中しているんだ。とやかく言われる筋合いはない。

話が脇道にそれてしまって、すみません。さて、俺の音楽論が一段落したところで、それまであくびをかみ殺しながら、露骨に興味なさそうな素振りを見せていた倉が、そろりと膝を乗り出してきた。

「ところで、ビデオ講座の方はどうですか？ だいぶ全体のつながりが見えてくるようになったでしょう」

全体のつながりもへったくれもない。部分部分の意味さえ、俺にはよくわからないのだ。ましてや、第三回以降ほとんどビデオなど視てはいない。そんな俺に全体のつながりなどわかるはずがないではないか。

なおも倉は、まるでテストでもするような口調でいくつかの質問をぶつけてきたが、俺に答えられるはずもなく、笑ってごまかすしかなかった。

すると倉は表情を引き締め、

「あまりよく理解できていないみたいですね」

と低くつぶやいて居住まいを正し、坊さんの説教のような調子で滔々と語り始めた。内容はビデオ講座の二番煎じである。思わずため息が出た。

こんなことなら、島原か梶本の下宿にでも避難しておくんだった。昼間のバイト探して疲れていたから、島原と一緒にバイパス沿いの定食屋で晩飯を食ったあと、そのまま下宿に帰ってきたのである。心地良い音楽でも聴いて、ゆっくり疲れを癒そうと思っていたのに……。俺は目の前の倉よりも、自分自身の運の悪さに腹が立った。

話は延々と続いた。倉は半分目を閉じ、自分で自分の弁舌に酔いしれている様子である。今度は俺があくびを我慢しながら聞き流す番であったが、そのうち話の内容が徐々に変質しているのに気づいた。宗教に名を借りた戯言が、次第に政治的色彩を帯びてきたのである。

「あと数年のうちに、北方から『赤い侵略者』が攻めて来ます。彼らは、世界中を自分たちの思想で塗りつぶそうとしているんです。私たちは、その時に備えて救世主の再臨を祈らなければなりません。救世主とともに闘うことで『赤い侵略者』をこの世から滅亡させることができ、真の平和と協調が訪れるんですよ」

はあ、そりや大変ですねえ…なんて茶化してやりたくもなかったが、倉は大まじめである。俺は少し注意を払って話に耳を傾けていたが、そのうち「マルクス」「レーニン」「プロレタリア独裁」などという単語が飛び出してきた。こうなると『赤い侵略者』というのが何者なのかは明白である。

(反共産主義かよ)

俺は内心、舌打ちをした。「赤」は共産主義の象徴である。

正体不明の不可解な宗教にイデオロギーまで絡んで、事態はますます複雑になってきた。まあ、誰がどんな思想や主義・主張を持つかが、それは当人の勝手だし、宣伝・布教するのも自由である。

だが俺自身は、共産主義にも帝国主義にも原理主義にもかぶれるつもりはない。不毛なイデオロギー論争に巻き込まれるのは、真つ平ごめんである。

そんな俺の心中も知らずに、倉は一時間以上もしゃべり続け、

「それじゃ、明日。待ってますよ」

と言いつつ残して、軽やかな足取りで去って行った。言いたいことを洗いざらいぶちまけたので、すつきりしたのだろう。

対照的に、残された俺は一人、夜の静寂の中で自責の念にかられていた。

ビデオ講座にかこつけて無料で映画を視聴ことができるというので、ついいい気になってアパートに入り浸ってしまったが、やはりあそこはまともな人間の出入りする場所ではない。もつともらしい笑顔の下に隠された邪悪な企みを直視しようとしなかったのは迂闊だった。

あの笑顔で油断させ、隙のできた頭をビデオ講座で地ならしし、その土台の上に反共思想を植えつけていくつもりなのだろう。映画ばかり視ていたおかげで洗脳程度の低いことが、今となっては救いである。

ひよつとすると…：奴らは、俺の洗脳の進捗が芳しくないことに疑問を抱き、いったい俺がどこまで彼らの思想に染まっているのかを把握するため、今夜、倉を送り込んできたのではあるまいか。いったんそう思うと、どうもそのような気がしてきた。いや、きつとそうに違いない。

そこで、俺はある恐ろしい考えに思い至って、ぞくりと身を震わせた。

今夜の倉のテストによって、俺の洗脳は遅れているということが、はっきりと確認されたわけである。とすると、奴らはこの遅れを挽回するため、近いうちに何らかの「非常手段」に訴えるので

はないか。それはいつ……どんな方法で……？

こうなったら、もはや映画どころではない。絶縁あるのみだ。幸い、ビデオ講座も残すところ、あと二回。明日と明後日でさっさと済ませて、おぼんと倉に絶縁状を叩きつけよう。

本当は明日にでも縁を切ってしまいたいのだが、やはりひとつの区切りはつけたほうがいいだろう。中途半端な状態では話も切り出しにくい。ビデオ講座の終了を以って、俺は世迷言の世界から抜け出すのだ。

後になって、俺はこの決断を痛切に悔やむことになる。たとえ修羅場をくぐることになるうとも、一刻も早く絶縁すべきであった。おぼんや倉との対決を先伸ばしにしたために、かつて経験したことのない窮地に陥ることになるうとは、心の片隅で潜在的に予期していたのかもしれないが、意識の表面では思ってもいなかったのである。

翌日の午後、俺と梶本と一緒に学食で昼飯を食べた後、三時限目の西洋史の教室へと向かった。西洋史の担当は人文学部の古屋教授である。風貌は温厚だが、単位にはかなり厳しい。抜打ちで出席を取り、欠席が三回以上になると試験を受けさせてもらえないのである。

授業開始までしばらく時間があるせいか、教室にはまだ十人前後の学生しかいなかった。俺は、その中に友人の津久田の顔を見つけ、手を上げた。彼は工学部の同級生数人と雑談している様子だったが、すぐに俺たちの姿を認め、応じた。俺たち二人は、彼らのすぐ後ろの席に着いた。

津久田が何やら他の連中に向かってしゃべっている。俺は聞くともなしに聞いていた。

「その会は『真理研究会』ってよ、最初は『いろんなビデオを視ませんか?』って、映画やらアニメやらのビデオをエサに新入生を誘うらしい。で、連中、初めのうちはやさしく笑顔で迎えて、しよっちゆうメシもご馳走したりして、アットホームな雰囲気の中で、親元離れた学生をターゲットに取込みを図るんだってよ。」

でも、油断していると、そのうちにわけのわからんビデオを視せられたり、『救世主』がどうこうっていう妙な話を聞かされたり、合宿みたいなものまで強制的に参加させられたりして、徹底的に洗脳されるらしい。で、気づいた時にはもう抜けられなくなってるって。

しまいには、学校も放つたらかしにして、家にも帰らなくなって、最悪の場合はそのまま行方不明になったり、悩んだ末に自殺する者もいるって聞いたぜ」

俺は話の途中から背筋が寒くなってきた。津久田が解説するところの「真理研究会」と、俺が今通っている「ビデオを視る会」は、その活動内容においてあまりにも酷似しているではないか。「わけのわからんビデオ」だの「救世主」だの「洗脳」だの、俺があので経験したことそのものである。

「メシもご馳走」云々についても、また然り。実は俺も頻繁に誘われたのだ。世迷言や反共思想を語り合いながら囲む食卓など気が進むはずもなかったが、タダ飯の魅力に負けて二度ほど茶碗をかかえてしまった。

（あれは本当に「真理研究会」なんだろうか）

俺はまだ半信半疑の状態だった。というより、信じたくなかったといった方が正しいかもしれない。

やっとなのおもいで国立大学に潜り込み、さあこれから、という時に、カルト宗教団体にとつ捕まってるその後の人生をパーにしたとあっては、親兄弟や親類縁者、友人や同級生にどの面下げて相見えることができるのだ。そんな生き恥をさらすような真似は、死んでもできない。いや、死んだら

生き恥をさらすことはできない。生き恥とは、この世に生きているために受ける恥のことなんだから。いや、そんな理屈を呑気にこね回している場合ではない。

「おい、聞いてんのか？」

梶本の声で、俺は奈落の底に突き進んでいくような思考から引き戻された。梶本は俺の顔を横からのぞき込んで、

「何だか顔色悪いぜ。どうかしたか？」

「いや、何でもなし。それより何だつて？」

俺は慌てて話題を変えた。俺が「真理研究会」とおぼしき団体と関わっていることなど、今の時点では梶本にも知られるわけにはいかない。

「今度の土曜日によ、島原や津久田らを呼んで一緒にスキヤキでもしない？」

「お、そりゃいいな」

「じゃ、場所は提供するから、おまえ、スキヤキ鍋持ったら貸してくんない？」

「ん、わかった」

梶本の言葉に答えてはいたものの、はっきり言っとうわの空。頭の中はスキヤキどころではなかった。

とにかく、今日アパートに行ったら、おぼんや倉を問い質さなければならぬ。果たしてあれは「真理研究会」なのか否か。最悪のことを考えると、確かめるのが怖くはあったが、避けて通れる道ではなかった。

(確かめるだけ確かめて、どのみち絶縁するしかないな)

俺は心中でつぶやいた。津久田の話が、俺の脱会の決意を確固たるものにしたのである。

「ええ。確かに、この会は『真理研究会』ですよ」

津久田の話を聞いてから二時間後、アパートの一室で俺と向かい合ったおぼんと倉は、しゃあしやあとした顔でそう答え、俺のわずかな望みを完全に叩き潰してくれた。

目の前が真っ暗になった。床が崩れ、真っ逆さまに暗渠に落ち込んでいくような気がした。

やはりこれは「真理研究会」だったのだ。一度足を踏み入れたが最後、抜け出すことなどかなわ

ず、徹底した人格改造を施されて布教のための一齒車として人生を終えるしかないという狂気の教団。どういう運命のいたずらか、俺はまんまとその罠に囚われてしまったのである。

だが、いつまでも悲劇に浸っているわけにはいかなかった。何か、何らかの打開策はあるはずだ。今、絶望で自棄になってしまっただけは元も子もない。落ち着いて、あくまで冷静に、この窮地から逃れる方法を模索するしかないのだ。

しかしおぼんは、奈落の底から這い上がろうとしている俺をめぐめて、容赦なく追撃弾を浴びせてきた。

「ところで、今週の土曜日から日曜日にかけてですね、ここから少し離れた所にある研修所で『2 DAY S セミナー』というのが実施されるんです。とてもためになると思うので、ぜひ参加してほしいんですけどね」

きたきた、これだ。これが津久田の話に出てきた「合宿」というやつなのだろう。そして、遅れ気味である俺の洗脳を推し進めるための「非常手段」であるに違いない。

一体そのセミナーで何をするつもりなのだろう。朝から晩まで洗脳用のビデオ漬けにされるのか、あるいは反共思想の講義攻めか。

ひよつとすると、そんな甘いものではないかもしれない。コンクリートの地下室に監禁され、飲食を断たれ、不眠不休で朦朧とした状態にされて、組織への忠誠を強要されるとか、ドラッグとか、覚醒剤とか、ロボットミイ手術とか……。

しかし、まさかそこまで……いや、こいつらなら、それぐらいのことやりかねない。危ない。絶対に危ない。

「どうしますか？」

おぼんが俺の顔をのぞき込んで返事を促した。横からは倉が、まじろぎもせず俺を顔を凝視している。

その時である。まさに天の啓示のごとく、脳裏に閃いたものがあつた。二時間前の梶本との会話である。

「今度の土曜日にスキヤキでもしない？」

これだ。これしかない。さつきは津久田の話に動転していたため、梶本提案は速やかに頭の片隅に追いやられてしまったが、こうなったら「土曜日のスキヤキ」はセミナーへの参加を断る絶好の口実として大きくクローズアップされてくる。

俺は言った。

「土曜日の夜に友だちとスキヤキすることになっているんで、参加は無理です」

おばんがポカンと口を開けた。目に驚愕の色が浮かび、顔面の筋肉が硬直した。ショックで言葉を失ってしまった様子である。かたわらの倉も咄然としている。

「……スキヤキですって？」

しばらくして、おばんがあえぐように言った。

「ええ、スキヤキです」

俺は平然とうなずいた。

おばんと倉は、信じられないといった表情で顔を見合わせ、かぶりを振った。それから、おばんはおもむろに俺に顔を向けた。あまりの衝撃に、口元の筋肉がまだ引き攣っている。

「あのね」

話しかける声も、心なしか震えを帯びていた。

「これはあなたにとって非常に重要なことなんですよ。ええ、スキヤキどころじゃありません。あなたがこれから生きていくうえで一体何が大切なのかを、懇切丁寧に教えてくれるんです。実際、このセミナーを受けた人たちはみんな『人生観が変わった』と感激してくれるほどなんですよ。

それなのに、何がスキヤキですか。そんなにスキヤキが食べたければ、ほか弁でスキヤキ弁当でも買えばいいじゃないですか。あんなもの、適当にいろんな食材を放り込んで、砂糖と醤油で味付けしただけのいい、いい加減な、ええ、いい加減な、安易な料理。そ、そう、安易な、きい」

もはや何を口走っているのか、自分でもわからなくなったらしい。おばんは、まるでヒステリーの発作でも起こしたように、目を吊り上げ、両手をテーブルにバンバン叩きつけながら叫んだ。

なぜ、これほどまでスキヤキに対して拒絶反応を示すのだろう。過去に何かスキヤキに関する苦い経験でもあったのだろうか。

おばんは「いい加減」だの「安易」だのと罵ったが、スキヤキはとても健康的な料理である。野菜や肉やその他もろもろの食材をバランスよく食することができて、栄養価も高い。ただ、気を付けなければならぬのは味付けであって、あまり砂糖や醤油を使い過ぎると、体のためには……いや、まあそんなことはどうでもいい。

とにかく俺は、好物のスキヤキをそこまでコキおろされて頭にきた。受講したところでクソの役にも立たないことがわかりきっているセミナーと、気心の知れた友人たちと味わうスキヤキと、どっちが自分にとって大切か。そんなこと、あんたらに決めてもらういわれはない。俺はスキヤキが好きなんだ。だから、絶対にスキヤキをやってやる。

「僕にとってはスキヤキのほうが大事です」

俺は断固として言い放ってやった。さすがに、おぼんと倉は鼻白んだ様子である。

結局、その日に結論は出なかった。もう一度よく考えてくれ、と泣くように頼むおぼんや倉の顔を立って、その場は引き下がってやることにしたのである。

しかし、いくら考えても俺の決意が翻るわけではない。今となっては鬱陶しいだけのビデオ講座も明日で終わり、ようやく自由の身になれるのだ。

ただ、世間一般の常識が通用しない相手だけに、心の底に一抹の不安がないでもなかったが、なに、断固たる意志をもってぶつかれば、自ずと道は開ける。

ところが翌日、事態は予想もなかった方向に大きく転回し、俺の不安はもの見事に的中してしまうのである。

第4章

翌金曜日は雨だった。午後六時頃、俺はアパートに着き、玄関で傘をたたんでいた。

すると、おばんや倉やその他数人の上級会員が、待つてましたとばかりに猛烈な勢いで奥から飛び出してきたのである。

何かいつもと様子が違う。迫り来る奴ら一人ひとりの全身から、得体のしれない危険なオーラが放たれているのだ。

俺はギョツとして、その場に立ちすくんだ。連中はすばやく俺を取り囲み、相撲のがぶり寄りのような要領で、俺を玄関から押し出した。

「ちよつと待った！ いったい何なんですかつ」

わめきながら振り返ると、いつの間にも現れたのか、一台の乗用車が後部ドアを開けたまま停まっている。一瞬、開かれたドアが魔界への入口のように見えた。

「何すんですか！ ちよつと止めてください！」

俺が抗議の声をあげると、連中は口々に

「研修所に行ってもらうんですよ」

「さあ、早く早く」

「2DAYSセミナー、がんばってください」

「きつと役に立ちますよ」

などとわめきながら、降りしきる雨の中、俺を車に押し込めようとする。

俺は必死に抵抗したが、なにしろ多勢に無勢、とうとうむりやり車に乗せられてしまった。倉が急いでドアを閉める。それを待ち構えていたかのように、車はタイヤをきしませて発進した。

振り返ると、おばんや倉は玄関前に一列に並んで見送っていた。獲物を捕えた満足感を微笑みでたたえて……。俺は精一杯の憤りをこめて奴らをにらみ返し、絶望で曇る視線を前方に向けた。

車を運転しているのは、倉と同年輩に見える男子学生である。だが、ルームミラーに映る風貌は倉よりも数段上だ。中井貴一に似たなかなかの好男子である。いや、そんなことはどうでもいい。

俺は、ともすれば崩れそうになる体をぐったりとシートに預け、しばし茫然としていた。絶望と脱力感と激しい後悔の念がこみ上げてきた。

もうおしまいである。研修所、いや強制収容所に放り込まれ、ありとあらゆる思想教育や人格改造を施されるのだ。収容所を後にする頃には、おそらく俺は俺でなくなっていることだろう。真理研究会に従順な反共の犬になり下がり、青いバインダーを小脇にかかえて新入生に声をかけている自分の姿が脳裏に浮かんだ。

なぜ、もっと早く、この腐れ縁を断ち切っておかなかったのか。「ビデオ講座を終えてけじめをつけるまで」とか「泣くようにして頼む奴らの顔を立ててやった」とかいう、自己満足的なきれいなことが、自分自身を絶体絶命の窮地に追い込んでしまったのだ。

過ぎたことを今さら悔やんでもどうしようもない。どうしようもないが、今の俺には悔やむこと以外、できることはなかった。あまりの無力さに、俺の絶望感はいよいよ深くなった。

「今回のセミナーは……」

突然、運転席の中井貴一がハンドルの握ったまま口を開いた。

「あなたを含めて二人の受講者で行われます」

ああ、そうですか。もう好きにしてください。俺は返事をする気にもなれず、無気力な視線を車窓の外に向けた。

すでに夕闇があたりを包み込み、街の灯りや対向車のヘッドライトが雨の中に霞んでいる。注意して街の様子を眺めたが、どうも見覚えのない景色である。

俺はほぞを噛んだ。外の景色に注意していれば、研修所の場所について手がかりぐらいつかむことができたかもしれないのに。もっとも、場所がすぐにわかるようなルートの中井貴一が運転するかどうかは保証の限りではないが。

次第に灯りがまばらになってきた。ひたすら郊外に向かって走っているらしい。道もメインの国道を外れて、田舎の県道とか脇道といった風情である。ガードレールの向こうに田んぼが広がっているのが、薄暗がりの中に確認できた。

中井貴一はあれきり口をつぐんでしまった。俺も何も言わないし、言う気にもなれない。聞こえるのは車のエンジン音と、フロントガラスを打つ雨音だけであった。

やがて車は一軒の家の前で停まった。二階建て和洋折衷のありふれた造りだが、周囲を鬱蒼とした林に囲まれており、「悪魔の棲む家」とでも称すべき陰気さである。

中井貴一が門を開けて中に入った。仕方なく俺もあとに続く。雨は小降りになっていたので、傘

はささない。

傍らの茂みで何かがうごめく気配がした。葉ずれの音の間に、低いうなり声のようなものが聞こえる。番犬を放し飼いにしているらしい。

(これじゃ、迂闊に脱走はできんな)

この様子だと、庭のあちこちに罾や落とし穴ぐらい仕掛けられているかもしれない。事態はいよいよ絶望的である。

玄関前のポーチには外灯が灯っていた。扉を開けると、薄暗がりに照らされて奥に向かってまっすぐに伸びる広い廊下があった。どんよりと澱んだ空気の中に、微かにカビ臭さが漂っている。どうやらこの建物、あまり頻繁には使われていないらしい。

何が研修所だ。まるでホラー映画の世界じゃないか。暗がりにゾンビでも潜んでいるんじゃないだろうか。

突然、左手のドアがギギーツと音をたてて開いた。

一瞬、俺の心臓は凍りついた。だが、顔をのぞかせたのはゾンビではなかった。二十歳前後と見える、ごく普通の男である。風貌から察するに新生のようだ。もしかすると、一緒にセミナーを受けるというのが彼なのか。

案の定、中井貴一が「彼と一緒にセミナーを受ける浜田君です。それからこちらが…」と、俺たちを互いに紹介した。向こうが、ペコリと頭を下げた。俺も軽く会釈を返しながら、相手を観察した。

縮れ毛と柔和なまなざしが印象的な男である。力強さや鋭さはあまり感じられないが、人の良さそうな青年だ。

(彼にはあまり気を遣わなくて済みそうだな)

そこで俺は、あることに気づいてハツとなった。

このセミナーを受講させられるようになったということは、彼もまた、俺と同じような立場にあるとは考えられないか。何かよくわからないまま会に引きずり込まれ、半強制的に受けさせられたビデオ教育の効果があまり上がっておらず、洗脳の進み具合が遅れているということである。

こんなことをいつまでも続けるつもりはなく、彼もひそかに脱出の機会をうかがっているのではないだろうか。会にとつては危険分子だが、もしかすると俺にとつては貴重な「同志」かもしれない。俺は、暗黒の中に一条の光を見出したような気がした。

顔合わせが終わると、中井貴一は俺たち二人を二階へ案内した。階段をあがる途中で、廊下の突き当たりのドアが半開きになっているのが目にとまった。室内に脚の長いテーブルや冷蔵庫が見える。ダイニングルームになっているらしい。

その時、一個の人影がフツと視野を横切った。一瞬の印象だったが、髪が長く姿の良い女性である。食器の触れ合う音がかすかに聞こえた。食事の支度でもしているのだろうか。

二階の一室に入った俺たちの前で、中井貴一は自己紹介をした。

「私は藤岡といいます。今回のセミナーの責任者になっていますので、わからないことや困ったことがあれば気軽に相談してください」

今わからないのは、この研修所からの脱出方法であり、それがわからなくて困っているのだが、そんなことを相談したら生きてここを出られるか、それこそわからない。

続いて藤岡は、二日間のカリキュラムについて説明を始めた。それによると、朝は六時起床、朝飯を食って正午までが午前中の講義、昼飯を食って六時までが午後の講義、晩飯を食ったあと教育用ビデオを視て、一日の感想文を書き、十時消灯というものである。

「講師は真理研究会の県本部から来られる『桑野正巳』という方です」

どういうわけか、藤岡は得意そうに胸を反らした。わざわざ県本部から来て講義をしてくれるのだから、しっかり勉強しろ、という無言の意志表示なのか。

いくらなんでも、覚醒剤やロボットミ―手術は考え過ぎだったようだ。だが、講師が来て講義をするとなると、ビデオ講座の時のような大胆なサボタージュはできない。しかも、講義攻めは一日十時間以上も組まれているのだ。

「それでは、そろそろ食事の用意もできたでしょうから、下へ降りましょうか」

藤岡について一階のダイニングルームに入ると、テーブルの上に三人分の食事が用意されていた。先ほど見かけた女性が支度してくれたのだろう。だが、人の姿はない。

食事をとりながら、藤岡はいろいろな話をした。兵庫県加古川市の出身であること、この大学に進学した理由や真理研究会に入ることになったいきさつ等々……。倉と比べてざっくばらんな口調に、俺の緊張はやや緩んだ。

食事のあと、アメリカの有名カントリー歌手であるジョン・デンバーが主演する「OH! GOD」とかいう、神が実在するの否かをテーマにした映画を視て、その日は消灯になった。

俺たちには一階の一室があてがわれた。藤岡は二階で寝るらしい。

ようやく「同志」と話し合う機会が訪れた。せんべい布団を敷きながら、俺は、どう話を切り出したものか、あれこれ思案していた。

部屋の中を見回してみたが、赤外線カメラのようなものは見当たらない。問題は盗聴器だが、これはカメラと違って見つけるのは非常に困難である。まあ、盗聴器を仕掛けるとすれば、壁際やタンスの陰などの死角であろうから、部屋の中央で布団でもかぶって話をすれば大丈夫だろう。

二人分の床をとり、「おやすみなさい」を言って灯りを消してすぐ、俺は「ちよつと、いいですか？」と彼を呼んで耳打ちをした。

「話があるんですけど、盗聴器が仕掛けられているかもしれないから、布団かぶって話しましょう」

「と、盗聴器？」

浜田の声に、まったくの予想外といった驚きが感じられる。でも、そんなに意外なことでもあるまい。これまでの会のやり方から考えて、盗聴器の存在を警戒することぐらいは当然だと思うのだが。

俺たちは腹這いになって、布団の下の空間で顔を向かい合わせた。密閉してしまつては息苦しいので、安全と思われる一方向にだけ布団を手で持ち上げて隙間を作った。かなり珍妙な光景だろうが、俺にすれば真剣だったのだ。

「話というのはですね、明日あさつてを含めた今後のことなんですけど……」と、俺は話を切り出した。

「あなたがどういふいきさつで真理研究会に入って、今ここにいるのかは知りませんが、このまま会に在籍して活動を続けていくつもりなんですか？」

俺は単刀直入に尋ねた。本来なら、少しずつ探りを入れながら相手の出方を確かめていくべきなのだろうが、この際、そんなまわりくどい腹芸は抜きだ。

俺の問いに対して、浜田はただひと言、

「はあ」

と答えた。暗いので表情はよくわからないが、声の調子に当惑が感じられる。

「いや『はあ』じゃなくって、これからどうするつもりなのか、あなたの考えを聞いていますけど」

煮え切らない様子の浜田に、俺は苛立ちを抑えて突っ込んだ。

「え、まあ、僕も続けていく気はあまりないんですけど……。かと言って、なかなかやめさせてもらえそうにないし……。それにやめたいとか言ったら、どういうことになるか。いや、僕はそれが怖くて言い出せなくて、なんとかコトを荒立てずにやめる方法を考えているんですけど、いい知恵も浮かばないし……」

「でも、ここまで来たら、コトを荒立てずにとって無理じゃないですか？ ケンカするぐらいのもりで勝負に出ないと」

「ケ、ケンカ！ それはちょっと……。まあ、ビデオの中身については問題がありそうですけど、会の皆さんいい人みたいだし、いろいろお世話になっているわけだし……」

何を言っとるんだ、この男は。お世話って……。別に世話してくれって頼んだわけじゃあるまい。自分に隙があったことは否定できないが、それに付け入って強引に会に引きずり込み、夜中に下宿にまで押しかけ、あげくの果てにこんな研修所に強制連行する連中が「いい人」って、あんなね……。…。

浜田君、おそらくあんなこそが本当に「いい人」なんだ。類まれな善人か、底抜けのお人好しか。でも、これじゃ残念ながら「同志」にも「一筋の光明」にもなりえませんか。何の根拠もないのに、勝手に頼りにした俺が愚かでした。

落胆した俺は、気まずい沈黙がおりた密閉空間から這い出し、早々に眠ろうとせんべい布団に寝転がった。すると、浜田がおずおずと問い返してきた。

「……それで、あなたはどうするんですか？」

そんなこと、さっきの会話の流れからわかりきっているじゃないか。無類のお人好しというだけでなく、どうも頭の回転が鈍いというか、洞察力に難があるようだ。

いずれにせよ、浜田はまったくあてにならないことがわかった。この窮地から脱出するには、やはり自分自身の力をもってするしかないのだ。

「僕は続ける気はありませんよ。とにかく明日明後日をしのぎ切って、早々に脱出してやります」

俺はそう答えて眼を閉じた。それは浜田への当てこすりであると同時に、真理研究会への宣戦布

告であった。

それから二日間、すべてはスケジュールどおりに進められた。

真理研究会県本部から来たという講師・桑野正巳は、俳優の角野卓造に似た風貌の中年男であった。

講義の進め方は、あのビデオ講座とまったく同じである。時おり、水差しの水で喉をうるおす以外は、ほとんどぶっ続けで喋りまくり、黒板に書きまくるのだ。その目はもはや常人のものではなかった。妖魔にとり憑かれたように熱っぽい光を放ち、どこか焦点が定まっていないのである。いわゆる目が「飛んでいる」状態とでも言おうか。その偏執狂的な印象も、ビデオ講座の講師に合い通じるものがあつた。

ただ、ビデオ講座と違うのは、おもしろくないからといって絶対に早送りできないことと、俺たちの背後で藤岡が監視の目を光らせていることである。

こんな状況では、居眠りもできやしない。仕方なく俺は、無機的な視線を呆然と桑野に向け、頭の中ではまったく別の思考をもてあそんでいた。

たまに横目で浜田の様子をうかがったが、どういうわけか彼は、常に熱のこもった視線を桑野に向けて一心不乱に講義を拝聴しているのだ。理解しようと努めてはいるのだが、やっぱり理解できないらしく、ときどき眉間にしわを寄せては頭を捻っていた。

そんなわけで、俺は二日間の講義の内容をほとんど覚えてはいない。ただ一日目が旧約・新約聖書のほとんどこじつけとも言うべき独自の解釈であり、二日目が反共思想の教育だったことを、かろうじて記憶に留めているのみである。

このように、頭を使うことはほとんどと言っていいほどなかったのだが、それでもセミナーが終わる頃になると、俺の心身は疲労の極みに達していた。

いくら意識がよそを向いていても、桑野の講義は目の前で、しかも真理研究会の宣教師に共通した異様なオーラをともなつて行われているのだから、毒気にあてられずにいるのはまず無理というもの。

それに、講義中は用足しに行くこともままならないのだ。それどころか姿勢を崩すことも許されず、机上に手を揃えて置き、まっすぐに桑野の顔を見つめていなければならない。何の因果で、半狂（反共？）中年男の顔を何時間も注視し続けなければならんのか。見るに耐えない容貌とまで貶めるつもりはないが、それにしたって限度というものがある。

脳細胞が徐々に侵され、肉体的疲労が進行するにつれ、怒りがふつふつと湧き起こってきた。な

ぜ俺が、こんな無意味で不条理な苦役に服さなければならぬのだ。

怒りが疲労を助長し、疲労が怒りを煽るといふ悪循環が幾度となく繰り返され、桑野が講義の終了を告げた二日目の午後五時すぎには、俺の頭と体は綿のようになっていた。疲労の極致に至ったという点では、浜田も俺と同様であろう。ただ、俺にとつての救いは、この時点でも俺はまだ自身を見失っていないということだった。

「それでは、最後の総まとめとしてビデオを視聴してもらいます」

藤岡は、疲れきった俺たちの様子を眺めて、満足そうな笑みを浮かべながら、ビデオをセットした。

あともう少しだ。これを使い切れば、当面の最大の危機は脱したことになるだろう。絶対に負けるもんか。

ビデオが始まった。まず真理研究会がいかにして誕生し、どのような布教活動を行なってきたのかということ、教祖だとかいう頭のはげた韓国人のおっさんが登場し、続いておもに大学における布教活動の様子が紹介された。

後半は反共プロパガンダ一色で、共産主義がいかによくない思想であるかを、虚実とり混ぜて解説し、それを打倒するために真理研究会では「国際反共連合」という右翼団体と友好関係を結んで、世界的な反共活動を行なっていること、さらに将来の展望として、真理研究会の統一思想が世界を席捲する日も近い、真理研究会万歳！という、荒唐無稽というか、もはや救いがたい内容である。

視ているうちに、だんだん胸のあたりがむかついてきた。

断っておくが、俺は決して共産主義を支持しているわけではない。というか、その逆である。共産主義国家なんて、今や崩壊寸前じゃないか。醜い権力闘争、腐った官僚機構、非現実的な計画経済、国民生活を監視・抑圧する強大な軍隊と秘密警察……。

そもそも共産主義には「暴力革命」と「プロレタリア独裁」という根本概念がある。すなわち、労働者階級（プロレタリアート）が武力によって権力を奪取し、ブルジョアジーや中産階級に徹底した独裁を敷くことによるのみ、階級や貧富の差のない理想社会を築くことができるというのだ。

しかし、これは大きな間違いであって、どこが間違いなのかというと、すべてが間違っているのである。

第一に「暴力革命」論。史上最悪の独裁者の一人・毛沢東は「共産主義は銃口によって産まれる」とか言ったそうだが、銃口であがなわれた権力はいづれ銃口の前に倒される。これは歴史の証明するところである。

第二に、独裁制はその主体が何であれ、必然的に絶対権力を産み出すことになり、絶対権力は絶対に腐敗するものなのだ。

またまた話が脱線してしまったが、このように俺は、共産主義に対してまったくと言っていいほど良いイメージなど持っていないのである。

では、なぜ真理研究会の反共思想に不快感を示すのか。共産主義が嫌いなもの同士でつるんでしまえばいいじゃないか。

確かに、俺は共産主義は嫌いだ。でも、もっと嫌いなものがある。それは、権威権力の側から特定の主義主張を押しつけられることなのだ。

日本のような民主主義国家においては、権力によって特定の思想を押しつけられることは（表向きは）まずあり得ない。それは、民主主義が言論・思想の自由を標榜している以上、たとえ民主主義の思想であってもそれを強制したり、反対思想を弾圧したりすることは、論理矛盾となり自己否定につながるからである。もともとドイツなどに見られるように「戦う民主主義」の例もあるが。

逆に言えば、民主主義というものは、その内部に、自らを破壊し覆そうとする敵対思想も包含しなければならぬ。そこに、この体制の宿命的な脆さがあるのだ。

いやまあ、そんな小難しい理屈はさておいて……とにかく俺は子どもの頃から「押しつけ」られるのがイヤだったのだ。些細な話ではあるが、勉強にしろ遊びにしろ、親や教師から強制された瞬間に、自分の中で気持ちが悪えるというか、「言われるとおりにほしくないよ」的な反発心が頭をもたげるといふか……。

また、多数派に盲目的に同調することもイヤで、先生の言うことをよく聞く手のかからない優等生集団を、少し離れたところから斜に構えて見る傾向があった。今にして思えば、確かに子どもらしくないヒネたガキだったので、教師からはよく疎まれ冷遇されたものである。

ただの異端児、またはひねくれ者、あるいはへそ曲がりと言ってしまえばそれまでだが、たとえ本音では自分にとって同調できる事柄でさえ、押しつけや強制の匂いを嗅ぎとった途端に、拒絶反応を現してしまう。

ましてや、数千人の信者を前に教義を説く韓国人教祖とそれにひれ伏す信者たち、なんていう光景は、俺にとっては何ら感動や感銘を与えるものではなく、単に嫌悪と侮蔑の対象でしかないのだ。

そんなことを考えながら、俺はじつとスクリーンを見つめていた。人格改造の総仕上げをするために用いられたビデオが、俺の反強制アレルギーを誘発したとは皮肉である。

やがてビデオは終わった。藤岡は満足そうにふっとため息をつき、

「それでは最後に、今のビデオの感想文を書いてもらいます」

と言って、四百字詰め原稿用紙を俺たちに手渡した。

感想だと？ よし書いてやる。

『僕は主義主張を強制されるのが大嫌いです』

長々くどくど書き連ねている様子の浜田をしり目に、俺は現在の心境をただ一行で表現して、原稿用紙を裏返し、その上に鉛筆を置いた。

「それだけですか？」

藤岡が目丸くした。

「ええ。これだけです」

俺はうなずいた。

ついに俺は、自己の人格を崩壊させることなく、二日間の思想教育を乗り切ったのだ。原稿用紙の一行は、事実上の勝利宣言であった。

それから俺たちは、藤岡の運転する車で再び真理研究会のアジトに戻った。

アパートでは、おばんや倉が最高級の笑顔で俺たちを迎えてくれた。まるで戦場から凱旋帰国した英雄をもてなすような歓迎ぶりである。どうやら人格改造が成功したものと信じきっているらしい。おめでたい連中だ。

おばんと倉は、俺たちを一人ずつ別室に招き、さっそく尋問を始めた。俺を担当したのはおばんである。

「セミナーはどうでしたか？」

おばんは相変わらず上機嫌である。満面に笑みを浮かべ、弾むような調子で尋ねてきた。

「まあ、いろいろと考えさせられましたね。これから自分がどうするべきか」

おばんは満足そうにうなずいて

「それでさっそくなんですけど、今度は『7 DAYSセミナー』が再来週の月曜日から実施されるんです。ぜひ参加してほしいんですけどね」

「2 DAYS」がようやく終わったと思ったら、今度は「7 DAYS」だと。バカにするのいい加減にしろ。誰が参加なんかするもんか。

だが、俺は「考えておきます」と答えて、その場をかわした。おぼんは少し意外そうに眉をひそめたが、すぐ思い直したように

「それでは明日、返事を聞かせてください」

と言って引き下がった。

参加する気など毛頭ないのに曖昧な返事をして逃げたのは、おぼんの圧力に屈したからではない。最終決戦の準備をするために時間がほしかったのだ。万全の態勢を整えておかないと、先日のようにむりやり車に乗せられでもしたら、今度こそおしまいである。二日ぐらいならともかく、七日間もあんなことを続けられた日には、人格改造を通り越して廃人になってしまう。

その夜、俺は長い時間をかけて、これまでの真理研究会との関わりを手紙に書き上げた。衝撃的な倉との出会い、ビデオ講座の内容、スキヤキ冒とく事件、そして地獄の2 DAYSセミナー等々……。

俺はひたすら書き続けた。書かずにはいられなかった。最悪の場合、これは俺の遺書になるかもしれないのだ。そう思うと、ときおりペンを握る手が凍りつき、無念の涙が頬を伝った。

執筆作業は午前二時すぎに終わった。便箋二十枚という膨大なものである。それを丁寧に折りたたんで封筒に入れ、糊で厳重に封をした。宛先は「〇〇県警捜査一課」とした。

本当に捜査一課でいいのか、確信はない。ただ、経済事犯の二課や窃盗・空き巣専門の三課や暴力団担当の四課ではない（見方によっては真理研究会は暴力団と言えなくもないが）から、やはり殺人・傷害等の強力犯を扱う一課が妥当であろう。

それから俺は床に入った。体は綿のように疲れきっているはずなのに、目は冴える一方であった。仕方ないので、暗い天井を見つめながら、明日の作戦をあれこれ模索した。

相手の出方によって、好機と見れば攻め、窮地に追い込まれたらサッと身をかわず、といった具合に、臨機応変のゲリラ戦法をとるか。

(いや、そりゃ無理だ)

俺はかぶりを振った。言うのは簡単だが、そんな器用な芸当ができるくらいなら、ここまで事態は深刻化していない。実際にこれまでは、相手の出方をうかがっているうちに、いつの間に敵のペースに巻き込まれ、あれよあれよという間に追いつめられて、最後は白旗、というパターンで何度も手痛い敗北を喫しているではないか。

貝になるしかない、と俺は考えた。脱会するという意志を告げる以外は、どんな甘言を弄されようと、どんなにひどい言葉で罵倒されようと、貝のように口を閉ざしてひと言も応答せず、敵が攻撃に疲れて諦めるのをひたすらじっと待つのだ。今までに試みたことのない戦法である。相当な忍耐力を要求されるだろうが、もはやこれしかない。

そんなことを考えているうち、いつの間にか俺は、深い眠りの中に引きずり込まれていった。

翌朝、目を覚ました時は、すでに十時を過ぎていた。さすがに今日は学校へ行く気にはなれない。

顔を洗った俺は、精神統一のために部屋の真ん中で座禅を始めた。もちろんメシなど抜きである。ときおり生理的欲求を満たすために立ち上がる以外は、ひたすら心を無にして冷厳の世界に浸りこんだ。

そして七時間後の午後五時、俺の精神状態は理想的な状態に仕上がっていた。空腹のために膨れ上がった野性と、鋭利な刃物のように研ぎ澄まされた理性とが絶妙のバランスでせめぎ合い、マグマのように戦意があふれ出すという、戦いに臨むには絶好のコンディションである。

俺は畳の上に行儀を正して座り、例の封筒を前に置いた。二度ほど柏手をうち、手を合わせて深く頭を下げた。これは勝利のための切り札であり、いざという時の命綱である。だが戦いに敗れば、これは遺書となって県警捜査一課のもとへ運ばれる運命にあるのだ。

俺は封筒を懐に入れて立ち上がった。右手に機関銃を、左手にボーガンを携え、腰のホルダーにサブバイバルナイフを差し込んで、両肩から弾帯をたすき掛けにしたジョン・ランボー（映画「ランボー」シリーズ参照）のような心境だった。

俺はまず梶本の部屋を訪れた。彼とは四日前、西洋史の講義後に教室の前で別れて以来である。結局、楽しみにしていたスキヤキはおじちゃんになってしまった。それを考えると、改めて真理研究会に対する敵意がふつふつと沸き起こる。

俺はチャイムを鳴らし、ドアを開けた。梶本は寝転がって雑誌を眺めていたが、俺の姿を認めるなり跳ね起きて

「おまえ、土日に行つたいどこ行つてたんだ!？」

と噛みつきそうな勢いで迫ってきた。

「悪かった。ちょっとやややこしい事情があつてな。で、スキヤキはどうなった？」

「おまえがいないから、仕方なく三人でやったよ。それより、ややこしい事情って何だ？」

「それなんだけど……」俺は声のトーンをやや低くして「その事情に関係して、今からある場所に殴り込みに行くんだけど、もし俺が今夜の十時までにここに戻ってこなかったら、手間をとらせるけど、これを警察に届けてくれんか」

と、例の封筒を手渡した。

「警察!？」 梶本は目をむき、封筒と俺の顔を交互に見ながら「一体どういうことだ？」

「今は詳しい話をしている時間がないんだ。無事に戻ってこれたら洗いざらいぶちまける。じゃ、頼んだぞ」

そう言っただけ俺は、あつげにとられている梶本のもとを辞し、真理研究会のアジトへ急いだ。

着いたのは六時ジャストであった。さつそく、おばんと倉は俺を個室に招き入れた。どういうわけか、二人とも昨日とは別人のように厳しい顔つきである。見ると、部屋の真ん中に置かれた座卓の上に、俺の一行感想文が載っかっているではないか。

(ははあ、あれを見たな)

予想していたことだから、別段驚きもしない。俺はおばん・倉と、座卓をはさんで向かい合った。

おばんが感想文を指でつつきながら、

「これは一体、どういうことですか？」

と切り出した。声の調子も硬い。

「どういうこともこういうことも、そういうことですよ」

俺は唇の端に薄笑いを浮かべてうそぶいた。

これは、過去の敗北パターンを分析し、思案に思案を重ねた末の、俺の秘策であった。敵のペー
スにはまる前に、その出鼻をくじき、戦いの主導権を握ってやろうと考えたのである。封筒が最後
の切り札なら、これは言わば先制の奇襲攻撃であった。

はたしてこの作戦、見事に功を奏した。

俺の言葉を聞いた途端、おばんと倉の口がうつろに開き、目が点になったのである。やがて、探
るような目つきでまじまじと俺を顔を見つめ返してきた。今日の俺が、昨日までとは違っているこ
とに気づいたのだろう。その間隙を逃さず、俺は一気にたたみかけた。

「昨日、僕は言いましたね。『セミナーを受講したおかげで、これから自分がどうするべきかわ
かった』と。つまりですね、こういうことからは一刻も早く足を洗うべきだとわかったので、今日
を最後に脱会します。それでは」

俺は立ち上がろうとした。それまで、俺の変貌ぶりを呆然とながめていたおぼんと倉は、はじめたように我に返り、

「ちよ、ちよっと、ま、まあ、待ってください」

と慌てて俺を押しとどめた。その狼狽ぶりは、敵の戸惑いがいかに大きいかと如実に示すものであった。

【反撃その1……脅し】

「何があったのかはわかりませんが、まあ、とにかく落ち着いてください。話はゆっくりしようにじゃないですか」

いいえ。これ以上、話すことなど何もありません。自分の決意をはっきりと表明した今、俺のなすべきことは作戦どおりただひとつ、貝になることのみである。俺を自分で発声器官をクロージした。

「いいですか。道を誤ってはいけません。これは、あなたにとって非常に大切なことなんですよ」

「……」

「何度も言っているように、人は誰でも生まれながらにして罪を背負っています。その罪から救われる唯一の方法が、この真理研究会で統一思想を学ぶことなんです。今ここでその勉強をやめたら、あなたはこれから一生、罪の十字架を背負って生きていかななくてはならないんですよ」

「……」

「それに、この罪はあなたについて回るだけじゃありません。あなたの両親や兄弟や親戚縁者の末端にまで何らかの災厄をもたらしかねないのです。あなた、それでもいいんですか？」

とうとう靈感商法まで持ち出してきやがった。「先祖の祟りで不幸になる」とか「水子の供養が足りない」などと、言葉巧みにささやいて相手を不安に陥れ、高価な印鑑や壺(?)を購入させるという、悪どい商売である。

「今年の新入会員にしても、そのほとんどは地道に勉強を続けてくれています。中には『こんなすばらしい世界があったのか』と、感激のあまり涙を流してくれる人もいますよ。それなのに、あなたは……。情けないじゃないですか。今さらやめたいですって?」

おぼんは必死の形相で訴えてきた。倉も、窪んだ目の奥から焼けつくような視線を、俺の顔に浴びせてくる。

しかし、今日に限っては痛みも圧力もまったく感じなかった。ここにあるのは俺の体の抜け殻であり、精神は幽体離脱して高みの見物をしているといった感覚である。

そんな調子でおばんは、次から次へとあらゆる種類の脅し文句を浴びせてきた。頭の中によく詰め込めたものだと感心させるぐらいの豊富さ・多彩さである。だが、そのうちネタが尽きたのだから。それに、俺がまったく反応を示さないので、さすがに業を煮やしたらしく、しばらくして戦法を変えてきた。

【反撃その2……泣き落とし】

「あなたが入会して以来、私たち——私やこの倉君をはじめとする会員一同、あなたが少しでもよい環境で学べるように、誠心誠意お世話をしてきたつもりです。あなたが今脱会したら、それらの努力はすべて水の泡になってしまふんですよ」

「……」

「思い出してください。あなたに入会するきっかけを与えてくれた倉君、2DAYセミナーのお世話をしてくれた藤岡君、そして二日間、本当に熱のこもった講義をくださった桑野先生……。あなたの成長には、これらの人たちの期待が託されているんですよ。それを裏切るようなことができないんですか？ そんなひどいことが……」

おばんはふところからハンカチを取り出して、そっと目頭を押さえた。だが、それが演技であることを、俺は即座に見破った。なぜなら、おばんはハンカチの陰から上目遣いに俺の顔をチラチラとうかがっているのである。

それに、何が「裏切るようなこと」だ。俺は、入会させてくれともセミナーを受講させてくれとも、お願いした覚えはない。むりやり会にひっぱり込んで、いわれのない期待をかけたのはそっちの勝手であり、それに添わないからといって俺を裏切り者呼ばわりするのは、まったくの本末転倒、順序が逆転している。

俺に見破られていることを知ってか知らずにか、おばんはハンカチで顔を覆ったまま、くどくどと鬱陶しい泣き言を続けた。かたわらの倉までも、つられたように鼻をすすり上げ、拳で涙を拭くような仕草をしてみせた。

この連中、いったいいつまで見えすいた猿芝居を続けるつもりなのだろう。

【反撃その3……開き直り】

俺が頑として表情を変えずにいると、おばんはおもむろにハンカチを目から離してゆっくりと折

りたたみ、ふところにしまった。そして、俺の方にまっすぐに顔を向けた。

その陰悪な表情を見て、さすがに俺も身が引き締まるのを感じた。脅しも泣き落としも通用しないことを悟って、いよいよ最後の手段に訴える決意を固めたいらしい。

「そうですか。それじゃ仕方ありませんね」

おぼんはポツリとつぶやき、わずかに唇の端を歪めた。これまでに見たことがないほど、酷薄な表情である。

(来るか)

俺はすばやく頭を回転させた。

今、おぼんが口にした「仕方ありませんね」には二通りの意味がある。ひとつは「あなたにやる気がないのなら、脱会を認めるしかないですね」という諦めの意志表示。そしてもうひとつは、言うまでもなく最後のカードを切る決意を示したものの、すなわち「こんなことはしたくないが、脱会を阻止するためにはやむを得ない」という意味である。

ただ、おぼんの表情から判断するに、俺はどうしても状況を楽観することができなかった。

(よし、切り札を使おう)

俺はすばやく発声器官のスイッチをONにして、敵が行動に出ようとした機先を制した。

「そろそろ終わりにしませんか。何があっても続ける気はありませんし、ここでぐずぐずしていると別のところで騒ぎが起きる可能性がありますよ」

どういうことか、と怪訝そうな顔をするおぼんと倉に向かって、俺は言葉を続けた。

「実は、今までのこの会との関わりをすべて細かく手紙にまとめて、ある友人に預けているんです。もし僕が今夜十時までには彼のところに戻らなかつたら、その手紙は警察に届けられる段取りになっているんですよ。そうなつたら、かなり厄介なことになると思うんですけどね」

おぼんの顔が赤くなり、次に青くなり、最後に白くなった。そして、がっくりとうなだれてため息をついた。倉の上半身が力を失ったように揺れた。狙いどおり、相当なショックを与えたいらしい。俺がここまでの強攻策を講じているとは、さすがに予想していなかったのだろう。

室内に静寂が降り、そのまま凍りついたような沈黙の時間が過ぎた。十秒、二十秒、三十秒……。

しばらくして、おばんはおもむろに顔を上げ、それまでとはうって変わった弱々しい声で言った。

「わかりました。脱会を認めましょう」

その瞬間の喜びを何と表現しよう。ついに俺は勝ったのだ。

だがここはまだ敵地であり、油断は禁物である。俺は自分を戒めながら、あくまで渋く、口元だけに笑みを浮かべ

「それでは」

と、軽く会釈をして部屋を出た。

おぼんと倉は玄関まで見送りに出てきた。もう一度、儀礼的に頭を下げて立ち去る俺の背中に向かって

「よければ、またお話しに来てください」

と、未練がましく声をかけた。

俺は肩越しに拒絶の笑みを返して、そのまま後ろを振り返ることなく、歩き去った。

薬局の角を曲がり、路地から大学通りに出た。もうここからはアパートは見えない。

とたんに顔の筋肉が弛緩した。喜びの衝動が湧き起こり、俺は天に向かって拳を突き上げ、全身でガッツポーズを表現した。

ついに泥沼から抜け出すことができた。恐怖と絶望に耐え、甘言や脅迫に屈さず、自分の力を信じて戦い抜いたからこそ、最後の最後で道が開けたのである。

大声で叫び、笑い出したくなるのをこらえて、俺は歩いた。足が地についていないとは、こういう状態を言うのだろうか。

空を見上げると、満天に星が輝いていた。研修所に強制連行された三日前とは対照的な好天だ。

（勝利の夜にふさわしいな）

だが次の瞬間、俺は「あっ！」と声をもらして、その場に棒立ちになってしまった。大事な忘れ物をしたことに気づいたのである。

(傘、忘れた！)

そう、傘である。この町に来る前、地元で買ったばかりの、まだ新品同然の雨傘をアパートに置いてきてしまったのだ。

強制連行された雨の日に研修所に持って行き、昨日アパートまで持って帰ってはいたのだが、雨が止んでいたこともあって、ついそのままにしてしまった。今日こそは持って帰らなければと思いつつも、激しい戦いとそれに続く勝利の嬉しさのあまり、傘のことなど完全に忘れ去っていたのだ。

かなり値段が高かったただけあって、造りは頑丈だったし、デザインも気に入っていたのである。

(取りに戻るか)

俺はいったん振り返った。アパートのみすぼらしい傘立てに置き去られた哀れな傘の姿が、脳裏に浮かんだ。

しばらく考えた後、俺はかぶりを振った。やはりそれはだめだ。やっとの思いで抜け出してきた邪教の巣窟へ、のこのこ舞い戻るような馬鹿な真似はできない。

短くため息をついて、俺はゆっくりときびすを返した。残念だが諦めよう。手切れ金だと思えば安いもんだ。

ふと腕時計を見ると、すでに八時を回っていた。死闘は二時間以上にも及んだことになる。梶本はわけのわからないまま、俺の帰りを待っていることだろう。

俺は梶本の下宿に足を向けた。

それから一年が経った。学業のほうはそれなりに順調に進み、無事に教養課程を終えて専門課程に進級することができた。しかも難関と言われる経営学科である。

その日、前期の履修届を学務課に提出した俺は、大学正門前の交差点で信号待ちをしていた。一年前は自転車だったが、今日は徒歩である。

高校時代から酷使を重ねてきた自転車は、この一年間で完全に乗りつぶしてしまい、廃棄せざるを得ない状態になってしまった。それに代わる足として原付バイクを購入したので、今からそれを

受け取りに行くのである。

周りは新入生と思われる学生たちでいっぱいだった。こんな時間に下校しているところをみると、今日は各学部のオリエンテーションだったのだろう。

「ちよつと、いいですか？」

後ろで声がした。一年前の記憶がフラッシュバックし、俺は愕然として反射的に振り返った。

だが、その声は俺にかけられたものではなかった。隣に立っていた、ひと目で新入生とわかる少年に対して、青いバインダーを小脇に抱えた男がアプローチを試みている。その男の顔を見て、俺は息が止まるほど驚いた。

浜田だったのである。少しばかり様子が変わっているが、間違いない。2DAYセミナーで二日間を共に過ごした、あの「超」お人好しの浜田が、筋金入りのスカウトマンになって新たな獲物を物色しているのだ。

ただ、浜田の目はもはや善人のもではなかった。熱に浮かされたようなような、どこか焦点の合っていない、それでいて一心不乱に教義を追い求めているような双眸は、彼が完全に洗脳され果てたことを如実に示していた。

「あなたは神を信じますか？」

浜田は型どおりの言葉を続けた。新入生は当惑したように眉をひそめた。

一瞬、俺は警告を与えてやろうかと思ったが……やめた。二度と、真理研究会などと関わりを持ちたくない。

それに……おぼんが言っていたではないか。「こんなすばらしい世界があったのか、と涙を流す者さえいる」と。

確かにそうなのだ。俺は、いくら話を聞き、何本ビデオを視ても（視ていなかったけど）ちつともすばらしい世界だとは思えなかったから、脱会した。しかし、教義に感激し、共鳴できる人間は、その世界に没入することで幸福を実感できるのだ。どちらをとるかは、各個人の勝手である。冷たいようだが、この新入生も自分自身の判断で道を選ぶべきだ。

信号が青に変わった。俺は人の流れに混じって横断歩道へ足を踏み出した。二度と後ろは振り返らなかつた。

あとがき

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

トップページでもふれましたが、この物語は私自身の体験に基いて記したものです。二十年以上も前のできごとなので、記憶が曖昧になっている箇所が多く、細かい食い違いは多々あると思いますが、大筋の展開においては事実のとおりです。

対決前夜に書き綴った「警察宛の封書」が手元にあれば、より正確で克明な記録が再現できたはずですが、残念ながらあの封書は、脱出直後に立ち寄った梶本の下宿で、「勝利宣言だっつー！」とばかりに景気よくビリビリに破り捨ててしまいました。

したがって、これ以上つけ加えるべき新事実が出てくることはありませんが、ここでは「あとがき」として若干の補足を記しておきたいと思います。

おそらくおわかりのことと思いますが、物語中の「真理研究会」は正しくは「原理研究会」、そう、あの「統一教会」（世界基督教統一神霊協会）の下部組織です。おもに全国の大学を舞台に活動しています。

それまでは、そのような宗教や学生組織が存在することなど知りませんでした。私が脱会した直後、山崎浩子・桜田淳子の合同結婚式や靈感商法で話題となり、きわめて危険な団体であることを再認識させられ、改めてほっと胸をなでおろしたものです。

英名の略称で「CARP（カープ）」と呼ばれることも多いようですが、よりによってプロ野球の某球団名と同一とは、どこまでも世間をナメた集団ですね。

さて、再三繰り返しているように、基本的には事実に基づいた物語ですが、二箇所ばかり意図的に記憶と異なる記述をしたところがあります。

一つは、おばんがスキヤキに対して猛烈な拒絶反応を示した場面。スキヤキを口実にセミナーへの参加を断った私を、おばんが厳しくたしなめたのは事実ですが、ヒステリーの発作を起こして暴れたというのは、つい筆が走り過ぎた結果の誇張です。

もう一つは、最後のシーン。2DAY Sセミナーの浜田君が、私の隣に立っていた新入生にアプローチを仕掛けたというのも小説的脚色です。しかし、実際に浜田君が青いバインダーを抱えて学内を徘徊していたのは事実であり、おそらく彼は正式に入信してしまったのでしょう。

幸いにも私はわずかヶ月ほどの関わりだけで関係を断つことができましたが、2DAY S直後

の対決を避け、事なかれに流されて、あのままズルズル在籍していたら、浜田君のようになっていたことは明らかです。もっと深刻な事態に至っていたかもしれません。ぞっとすると同時に安堵のため息がもれますが、ただ浜田君のご家族の心痛を思うと、今さらながらやり切れなさに胸が痛みます。

本来、宗教とか啓発セミナーの類は、人々が心の平穏を得て幸せに暮す、あるいはそれを糧として人間的成長を遂げるためのものではないでしょうか。それを食い物にして一部の人間だけが私利私欲を貪り、騙された人たちやその家族は長年にわたって苦しみを背負い込むという構図は、憤りの対象にしかありません。

このサイトが、不幸への転落を未然に防ぐための、何らかのお役に立てれば幸いです。